

Title	大東亜の「夢」を葬るまで：林房雄の南方体験と「失はれた都」
Sub Title	Until he abandons the "dream" of the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere : Fusao Hayashi's experience in Southeast Asia and "The lost city"
Author	須山, 智裕(Suyama, Tomohiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.118, (2020. 6) ,p.25 (218)- 40 (203)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01180001-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大東亜の「夢」を葬るまで——林房雄の南方体験と「失はれた都」

須山 智裕

はじめに

林房雄は、マルクス主義から民族主義への極端な旋回がしばしば言及される作家であり、「勤皇の心」（『文學界』一九四二年一〇月）などはその極地として悪名高い。その一方で、林の太平洋戦争後期の活動の基軸となつた「劍と詩廿年後の大東亜」（以下「劍と詩」とする）（『毎日新聞』一九四四年八月一九日～一九四五五年二月二十五日）については取り上げられたことがほとんどなく、その詳細が不明なままでなつてゐるが、これは陸軍と毎日新聞社が後援した相当に大掛かりな企画であり、林研究においてはもちろんのこと、戦時下のプロパガンダの事例としても重要であると思われる。したがつて本稿の前半では、その全体像について明らかにしたい。

そのうえで後半は、終戦後の林の復活について取り上げる。林は最も積極的に戦争に加担した作家の一人と見なされ、一九四八年に公職追放を受けるより先に、終戦直後より共産党系の文学者などから痛烈なバッシングを受けるのだが、「公職追放にあつた文学者のうちで、一番早く「復活」した」のは林だつた。⁽¹⁾ その助けとなつたのは、他ならぬ戦中の従軍体験で

あり、林は自身が訪れた外地を舞台とした小説をいくつも発表し、それらが大衆文学の領域で評価を受けたことで、原稿の注文が殺到するようになつたのだ。本稿では終戦後に発表された林の小説の中から、内容面や思想面において「剣と詩」と関連のある短篇小説「失はれた都」(『小説と読物』一九四七年一月)を対象として、従軍体験のどのような加工が復活を準備したのか、具体的な分析を提示したい。

一、「陸軍報道班員」林房雄

「剣と詩」の企画が立ち上がりつかけについて、林は次のように語つてゐる。

実は先頃、谷萩^(マヤ)前報道部長から「二十年後の大東亜」といつた小説を書いてみないかといふ話がありました。日本は何のために戦ふか、戦後はどうなるか、学生などがこんなに戦争に行つてしまひにはどうなるか、といつたやうな懸念をしてゐる者がある。さういつたやうなことから「二十年後の大東亜」といふやうなことで君一個の責任を以て書かな

いかといふ話がありました。(『南方と日本人の反省』『台湾時報』一九四四年五月)

文中の「谷萩」は、一九四二年に陸軍報道部長に就任した谷萩(那華雄)の誤植であろう。ともかく林は陸軍報道部長から直々に、大東亜の未来を描くプロパガンダ小説の執筆要請を受けたのである。

以後「剣と詩」は、『毎日新聞』紙上で展開するイベントとなる。その最初は『毎日新聞』一九四三年八月一日の一面に掲げられた「小説『廿年後の大東亜』広く素材の提供を求む」であり、連載開始に一年以上も先立つ。この記事の中で、「国民各位が平素抱懐せらる、未來の共栄圈構想の披瀝により、この画期的大小説の豊かな素材たらしめることにした」として、「警抜なる着想、素材」の投稿が募集されている。その約二か月後には、各界の専門家が林に素材を提供するための懇談会が開かれ、その模様については「雄大な構想と素材『廿年後の大東亜』懇談会」(『毎日新聞』一九四三年一〇月七日)において、「廿年後の航空機の具体的設計計画」や「船舶交通文化の想定」などが披露されたことが報じられている。そしてその後より、林は執筆に向けた取材を目的に、「陸軍報道班員」として南方を巡るのだが、これは従来見落とさ

れていた経歴である。神谷忠孝は『文芸年鑑・二千六百三年版』（桃蹊書房、一九四三年八月）に掲載された徵用作家のリストを補足、追加し、一九四四年までに陸軍報道班員として徵用された作家として、井伏鱒二・高見順・火野葦平ら四七名を挙げているが、林の名は無い⁽²⁾。

さらに、林個人の年譜や研究を渉猟しても、陸軍報道班員として徵用されたという記載は見当たらない。この欠落の大本となつてゐるのは、三島由紀夫『林房雄論』（新潮社、一九六三年八月）に付された、「氏自身の執筆および校閲にかかるものである」という年譜である⁽³⁾。一九四三年一一月に「剣と詩」を毎日新聞に執筆のためフイリピン、ボルネオ、マライ、スマトラ、ジャワをまわる」とあり、一九四四年に至つては記載が全く無いこの年譜が、以後に年譜が作成される際の下敷きになつてゐるのである⁽⁴⁾。

例えば小泉浩一郎が作成した「年譜林房雄」は、「十一月、「剣と詩」を「毎日新聞」に執筆のため、フイリピン、ボルネオ、マライ、スマトラ、ジャワをまわる」と同文に等しい⁽⁵⁾。小泉の翌年に保昌正夫が作成した「林房雄年譜」も、一九五五年に「文学的回想」を新潮社より刊行⁽⁶⁾したことなど、新たな情報が一部追加されているものの、概ね『林房雄論』版年譜を約める作り方がなされているため、「十八年、『勤皇之心』を創元社より刊行。二十年、敗戦」と、南方視察の記述が削られている。そして林の伝記的研究である毛利順男の「林房雄の生涯及び文学的創造」も、「毎日新聞の用務でフイリッピン、マライ、スマトラ、ジャワをまわる」と反復するに止まっている⁽⁷⁾。

これらは林の南方視察の旅程についても、情報量が充分とは言い難いため、収集した資料に基づいて可能な限り再現したい。前出「雄大な構想と素材『廿年後の大東亜』懇談会」の中に、林を囲む「第一回懇談会を六日正午帝国ホテルに開いた」とあるため、出発が六日以降であることは確実である。加えて、一九四三年一〇月一五日の『マニラ新聞』に、林の「マブハイ比島—独立式典に参列して」というルポルタージュが掲載され、一四日の朝八時から式典に参列したことが記されているため、出発は六日から一三日の間に絞ることができる。したがって、南方体験を一月からとする『林房雄論』版年譜以来の情報は、ひと月ずれていることになり、修正が求められる。なお、「大東亜の文学世界文学としての東洋文学」

（月刊毎日）一九四四年一二月によると、マニラでは「二ヶ月ほどを」暮らしたということである。⁽⁹⁾

翌年発表されたル・ポルタージュ「南方の平和」（『週刊毎日』一九四四年一月三一日）では、マニラ湾に浮かぶ日米の激戦地コレヒドール島に上陸したことや、「マニラ、ボルネオ、昭南と旅をつづけて、既に一ヶ月半になる」ことが述べられている。昭南の滞在期間に関して、終戦の翌年に亡くなつた武田麟太郎を追悼する「散る花のなにをかいそぐ」（『新潮』一九四六年五月）内の、「武田のジャワ従軍からの帰り途、昭南（シンガポール）の宿で、私は彼と四十日ほど一緒に暮したことがある」という回想が手掛かりとなる。⁽¹⁰⁾ちなみに武田の昭南到着は一月八日で、翌年の一月には内地へ帰還している。⁽¹¹⁾

そして、昭南に統いて訪れたとされるスマトラの滞在時期については、一九四四年一月一九日の『スマトラ新聞』「人事往来」に、「陸軍報道班員作家林房雄氏は陸軍省の委嘱を受け□け行く共栄圏に取材せる□□小説をものすべく南方各地を視察中のところ先日来スマトラに来島、その□□をまとめるため約三週間島内各地を□□中である」とある。⁽¹²⁾最終目的地とされるジャワについては、林自身の記録や新聞記事等を発見することが叶わなかつたが、ジャワからの帰途、林が台湾で「二週間ほど島内各地を一巡し視察し」たことが、前出「南方と日本人の反省」において語られている。

最後に内地帰還の時期だが、一九四四年五月一七日の『毎日新聞』「未来小説『二十年後の大東亜』作者林房雄氏を囲み懇談会」にて、「昨秋軍報道班員として南方各地を約半歳にわたり視察し、富豊な資料と溢れる日本の興奮を懷いて先月末帰京」と記されていることから、四月末に帰還したと確定することができる。

以上を整理すると、このようになる。林は一九四三年一〇月一〇日前後に日本を発つて、マニラで約二か月暮らし、ボルネオは短期間で後にして昭南に行き、約四〇日を過ごした。統いて一月中旬までにスマトラに到着し、約三週間の予定で視察して、最後にジャワに赴いた。そこから内地への空路の中継地である台湾に約二週間滞在し、一九四四年四月末に内地に帰還した。

二、「剣と詩」の頓挫から大衆雑誌での再出発へ

七か月に及ぶ南方視察を経て帰還した林を迎えた「第一回の協力委員との懇談会」が、一九四四年五月一六日に開催されている（前出「未来小説『二十年後の大東亜』作者林房雄氏を囲み懇談会」）。同年八月二三日の『毎日新聞』「次回連載小説」では、「一大共栄圏小説『二十年後の大東亜』は本社がその企画発表以来、異常なる期待と関心を集めすでに一ヶ年の準備期間を経過した」といったように、高揚感をもつて「剣と詩」の「現代篇」の連載開始が宣言されている。

そうして満を持して紙面に登場した「剣と詩」だが、読者からの評判は芳しくなかつたようである。文芸評論家・高山毅は、「気魄の乏しさ（作品時評）」（日本文学者一九四五年一月）において以下のように苦言を呈している。

現在都下の新聞における現代小説は僅かに林房雄氏の「剣と詩」（毎日）を残すのみである。（中略）その題名の素晴らしさに引換へ、これほど面白くない作品も近ごろ珍らしい、といふのが読者層の一致した見解であるやうだ。それならば文学的には優れてゐるかといへば、それがまた、恐らく林氏の作品中最も出来の悪い作品であらうと考へられるのだから悲しい。私は議論ばかりの小説も一向構はぬと思ふが（青年はそのすぐれた例の一つだ）これは余りにもひど過ぎる。貴重な紙面であるだけに時評家のつとめとして私は林氏の反省を促しておきたい。作品の区々の内容でなく、創作態度の問題として――。

「剣と詩」は「議論ばかり」でともかく「面白くない」というのを、「読者層の一致した見解」とし、その「創作態度」まで非難している。確かに「剣と詩」の「現代篇」では、大東亜の現状や将来に関する議論や演説が延々となされおり、倦怠的であると言わざるを得ず、「雄大壯快なる未来小説」（前出「小説『廿年後の大東亜』広く素材の提供を求む」）、「雄渾な大東亜小説」（前出「未来小説『二十年後の大東亜』作者林房雄氏を囲み懇談会」）といった当初の謳い文句とかけ離れていることは間違いない。

こうした悪評を覆すチャンスは、執筆の本来の目的であり副題にも据えられている（廿年後の大東亜）を描く「未来篇」に残されていたはずだった。ところが、一九四五年二月九日の『毎日新聞』「次の連載小説」にて、「引き続き本小説の主題未來篇執筆の予定であつたが、更に慎重に準備を繕ふる必要を感じ一旦筆を擱き他日を期し再び読者に見ゆることとなつた」

と通知、凍結されたままで終戦を迎える「未来篇」は幻となつた。

以上のように「剣と詩」は、陸軍や毎日新聞社の多大な援助を受けたにもかかわらず失敗に終わつたのだが、この時に得た南方体験は、終戦後に違つた形で実を結ぶこととなる。

『文学的回想』（新潮社、一九五五年二月）によると、終戦後の林は戦犯作家としてジャーナリスト会議に睨まれ、「総合雑誌や文芸雑誌には書かせてもらえない」状況に陥つた。⁽¹³⁾ 林はジャーナリスト会議について、「左翼的でない出版社」に対し、「GHQを笠に着て、社長と重役を追放でおびやかし、用紙の配給停止と労働組合のストライキを武器にして押しまくつて来るのだから、狙われた側は抵抗できなかつた」と述べている。このように作家として窮地に立たされた林に救いの手を差し伸べたのが、夏目漱石の息子で編集者の夏目伸六である。「横須賀の列車の中で」会つた際、「『小説と読物』という大衆雑誌が出ることになつたが、それに小説を書かないか」と林を誘い、林が「ジャーナリスト会議が文句をつけに来るぜ」と心配しても、「うちちは紙を持つてゐるから大丈夫でしよう」と言い、翻意することはなかつたという。

一九四六年五月の「香妃の妹」⁽¹⁴⁾ を皮切りに、八月「妖魚」、一〇月「旅路の終り」、一一月「情史」と、林は『小説と読物』へ立て続けに寄稿する。ちなみに、林が初めて寄稿した一九四六年五月号の他作家の収録作は、同年の二月号をもつて休刊した『オール讀物』の、制作されるも出版されなかつた三月号からの転載が中心である。これは、解散した文藝春秋社から伸六と、同じく編集者の上田健次郎が、『小説と読物』発行元の桜菊書院に加入したことが理由と考えられる。

ブランゲ文庫に残されている『オール讀物』一九四六年三月号のゲラと、『小説と読物』同年五月号を比較すると、『オール讀物』の五つの小説（舟橋聖一「象鼻」・真杉静枝「今年の花」・徳川夢声「豪壯竹伝来記」・芹沢光治良「若い人達」・丹羽文雄「脱兎」）が全て『小説と読物』に転載されたところへ、林の「香妃の妹」が追加されて、六作の小説ラインナップとなつていることが分かる。高橋孝次は、「『小説と読物』の全四十一冊中、實に二十二回、林は小説を寄せており、登場回数は群を抜いてゐることなどから、「林房雄は『小説と読物』の顔といえる存在であつた」と指摘しているが、『小説と読物』の第三号という初期に、『オール讀物』から流れてきた小説群の巻頭に林が据えられていることは、彼と『小説と読物』

の蜜月の始まりとして、象徴的な出来事と言えよう。

さて、林が一九四六年に『小説と読物』に寄稿した小説の傾向だが、「香妃の妹」は北京、「妖魚」はスマトラ、「旅路の終り」は上海と、自身が戦時下に視察した土地を中心的な舞台としているものが多い。⁽¹⁶⁾「情史」は例外的に、幕末から明治にかけての祇園を舞台とする時代小説であるものの、林は作家としての再出発に際し、従軍体験を積極的に活用したと言える。そのような小説群を「大衆雑誌の編集者が注目しはじめ」、一九四七年から小説の発表数が爆発的に増加することとなる。⁽¹⁷⁾

その旺盛な執筆活動の初期、『小説と読物』一九四七年一月号に掲載された「失はれた都」は、単行本『ミモーザの花蔭』に⁽¹⁸⁾（新太陽社、一九四七年五月）の後、流布した新潮文庫『妖魚』（一九五一年一〇月）にも収録され⁽¹⁹⁾、三島の『林房雄論』の中で「傑れた短篇小説」と称えられもした、占領期における林の代表的短篇である。⁽²⁰⁾同作は「一九四三年の終り」のマニラに生きた「若手のシナリオ・ライタア」笠原宗吉の遺品である「比島日記」を、同時期にマニラに滞在していた従軍記者の〈作者〉が精読し、「一篇の物語を構成し」たという体裁をとっている。⁽²¹⁾こうした物語生成の過程は、まさに「一九四三年の終り」にマニラに滞在していた林が、戦後になつて当時の記録を振り返り、創作に昇華させる構図と相似している。

三、共鳴する日比のナショナリズム

「失はれた都」の骨格は、笠原と現地作家ホセ・アストリアノの出会いと交流、そして別れによって形成されている。笠原は「自分の書くシナリオ」に寄与する力量を備えた現地作家を探し、ホセに辿り着く。酒場で意気投合した二人は、夫人のマヌエラとも交えて親睦を深めるが、ある日笠原は「憲兵少佐の私室に連れて行かれ」、「アストリアノ一党」の動向を探る「スペイになる」よう要請される。その日以来笠原は、「憲兵の眼でホセやマヌエラを見ることをおそれ」て「ホセを避け」るようになるが、唐突にマヌエラの訪問を受けて海水浴に行くこととなり、「沖の防波堤」でホセから、「フイリピン独

立軍ゲリラ部隊の大尉」であることを告白される。笠原とホセは「一瞬の潔白なる親友として」握手をして別れ、程無くしてホセとマヌエラは逮捕、処刑され、マニラも空襲によつて破壊される。総じて、熱帯の色彩豊かで快楽的な世界に、ホセたちの正体をめぐるサスペンスも加わった小説である。

この物語内容のうち、ホセがゲリラの大尉であるという肝の部分は、意外なことに「剣と詩」の挿話の流用である。「剣と詩」の中で昭南放送局からラジオ中継される、大東亜青少年日本語大会のフィリピン代表ホセ・レイエスの兄、レオン・レイエスは作家で、次のような経歴を持つ。

アメリカの大学を出て、マニラの新聞社につとめてゐる間にその作品が認められ、コンモンウエルズの文学賞を受けました。兄の作品集はアメリカ本国でもたいへん評判になりました。パアル・バッカは（中略）氏の文体は激刺としており、性格描写は甚だ的確であると讃めました。アメリカ作家協会の書記長は（中略）この小説集によつて、自分は初めてフィリピン人を理解し得たやうな気がするといひました。兄の作品はアメリカの大雑誌に発表されるやうになり、マニラでは比島の代表作家の一人として世評的になりました。⁽²¹⁾

作家として成功したレオンは、「城内^{（イントラモロス）}の或るカトリック教会堂の地下室で行はれたゲリラ隊の組織に」参加し、「アメリカ・ゲリラ隊」の「陸軍大尉」になる。

他方、「失はれた都」のホセの経歴は、短篇集が「コンモンウエルズ文学賞」を受賞してアメリカで出版され、「パール・バッカ女史とアメリカ作家聯盟書記長」に推薦文を寄せられるなど成功を收め、後に「イントラモロスの教会堂の地下室で組織された」「ゲリラ部隊の大尉」になるというものであり、レオンの経歴の多くをなぞつていることは明らかである。しかし、レオンが終始「間違つた道を歩いた」「恥づべき裏切り者」の一例として扱われるのとは対照的に、ホセの位置付けは笠原との関係性の中で揺れ動いていく。

酒場での初対面の折、笠原はホセを、「薩摩や土佐や、その他黒潮に洗はれる日本列島の太平洋岸にしばしば発見される、鋭い眼光とや、尖つた頬骨と浅黒い皮膚の、隼人型と言はれる型」と見る。それゆえホセに「手を握られた瞬間に、高

等学校時代の薩摩出身の親友の握手を思ひ出した」。一方笠原は「北九州の生れで、黄白い皮膚と、やゝ斜めに切れ上つた細い眼を持」つ「大陸系の代表的な型」とされており、マニラの華僑を見慣れたホセの側も、笠原の顔に馴染みを感じたと推測される。そして酒場で語り合つた末、ホセは「眞のナシヨナリストは同時にコスマポリタンだ——ホセ・リサールの如く、またホセ・アストリアノの如く」という言葉で、笠原と自身の思想上の共鳴を説く。

こうしたアジア民族の人種的な親近感や、ナシヨナリズムを経由した世界主義は、一九四三年一一月六日の大東亜会議で採択された、「独立親和」などの五原則を掲げる大東亜共同宣言の理念とも合致する。松本和也は、「今日からみれば滑稽にすら映じるとしても、同時代において大東亜会議は大東亜戦争遂行のための加速装置として、現実世界／言説双方において、大きな存在感・影響力をもつものだった」ことを指摘したうえで、⁽²³⁾大東亜共同宣言が果たした役割について、次のように整理している。

同時代の言説上において大東亜共同宣言は、大東亜戦争・大東亜共栄圏を肯定し、正当化し、論理的に根拠づけていく原動力になった。そのことと連動して、米英に東洋を対置する修辞も多用され、大東亜共栄圏という地域の外延が遂行的に改めて意識、言表されていく。そうした中、大東亜共栄圏を担う独立各國も、大東亜共同宣言の方針が自らの理念と等しいものであることを明示していく。他方、帝国日本は、大東亜各國の連携を謳いつつも、その主導権は日本にあるという二重基準を陰に陽に保持していった。⁽²⁴⁾

アジアの独立各國が連携して米英の支配に打ち勝ち、大東亜共栄圏を築いていくという「夢」が大東亜共同宣言には乗せられ、拡散されていった。もちろん、こうした理念とアジア各國における実情は乖離しており、「失はれた都」の冒頭にある通り、その「夢」は『不幸な幻想』にしかなり得なかつた。

先に見たように、二人は大東亜共同宣言の理念に沿うかのように、互いの思想の同質性を認め合うので、アジア民族が協力して大東亜共栄圏を築いていくという「夢」を、二人に投影することが可能となつてゐる。ただしこれには、憲兵が二人に干渉するまでは、という限定が付く。そして、「剣と詩」のレオンの所属が「アメリカ・ゲリラ隊」であるのに対し、ホ

セの所属が「フイリピン独立軍ゲリラ部隊」であることも、本来笠原とホセが協力する未来を描きやすくする方向に働く要素と言えるが、「フイリピン独立軍」は「日本人の敵」として行動する。その部隊はホセから「フイリピンを虐政し略奪するすべての者の敵だ」と語られるが、この条件に「愚劣で掠奪的で残酷極まる憲兵政治」が該当してしまうからである。次節では、憲兵や、笠原の内部に沈潜する「憲兵の眼」が、笠原とホセの友情にどのように作用するのか、具体的に検討したい。

四、大東亜の「夢」の行方

信頼関係を築いた二人が絶縁へと向かっていく、その発端は憲兵少佐からのスパイ命令であり、それは笠原を次のような心境に至らせる。

その日以来、笠原は気楽にアストリアノを訪ねることができなくなつた。憲兵をおそれたわけではないが、自分が知らず知らず憲兵の眼でホセやマヌエラを見ることがおそれたのだ。さうかと言つて、「君は狙はれてゐるよ」と注意することも余計なお世話である。もし実際にアストリアノがゲリラと関係があるのでしたら、そのやうな注意を与へることが小さいながら敵に有利な情報を提供することになる。

ここで笠原は、自身の内部に潜んでいるかもしれない「憲兵の眼」が表出することを「おそれ」と同時に、抗日勢力かもしれない人物に加担する〈非国民〉になることもためらつてはいる。こうした板挟みに陥つた笠原の胸中において、フイリピンの「平和な空氣の中に描いた甘い夢が見る見るくづれて行き、今まで色々と構想してゐたシナリオに筆をつける気がしなくなつた」。

〈作者〉は徵用された笠原が、「南方映画社の専属として、軍事宣伝映画の製作に当らせられた」と記している。「親フイリピノ派」の急先鋒である笠原は、日本人と南方の民族が手を取り合う「甘い夢」のシナリオを構想していたのだろうが、自身とホセの親交に憲兵が干渉してきた時点で、早くもそれが瓦解するのである。

その一週間後にホセから「致命的な秘密」、つまり抗日勢力であることを打ち明けられると、笠原は「僕が憲兵の眼を持つてゐなかつたことを残念に思ふ。(中略)僕は今この瞬間から君の敵として行動しなければならぬ日本人の一人だ」と述懐する。ただし、「憲兵の眼を持つてゐなかつたこと」への後悔は両義的である。それを裏付けるのは、笠原がこれ以後二度示す「無言」という態度である。

ホセが、笠原が自分に「近づいて來た」のは「憲兵隊の手先として」ではなく「人間として」であることを確認するためには、「カサハラ、僕のこの手を握つてくれるか。——お互ひに尊敬すべき敵として、また一瞬の潔白なる親友として!」と呼びかけると、「笠原は無言のまゝ、固くホセの手を握りしめた」。これは口にすることはできないながら、一方ではホセに同意したものと思われる。だがホセの逮捕後、憲兵少佐に「人間を信じたがる文学者の甘い桃色の夢を嘲笑」された際、笠原は「親フイリピノ派」としてそれに抗議するでもなく、「何事も答へなかつた」。すなわち笠原は、スペイ命令以後も「人間として」ホセに友情を持ち続けながらも、「憲兵の眼」に象徴される〈日本国民〉であることを手放さないというジレンマを抱えている。

このように、笠原はマニラで暮らしていた他の「多くの日本人」と同じく、「軍政の鉄の枠の外にはみ出る力や勇気」を持たなかつたがために、終戦後「死の病床で」、「すべての美しき人々を殺したのは私自身——戦争を肯定した野蛮な精神である」と懺悔したと考えられる。笠原は「今更、私がこの改宗を告白しても誰が信じてくれるであらうか。たとへ信じてくれる人があつたとしても、間に合はぬ、私の罪は消えない」とも書きつけているが、この予想は覆される。「日記を精読」した〈作者〉が、笠原を「おそすぎた改宗者」と呼びながらも、その「靈位」を「純潔」と見なすのである。

〈作者〉はマニラに住んでいた「多くの日本人」に対し、「それぞれ勝手な夢を描き、勝手な行動をしてゐた」というように突き放しているものの、「愚劣で掠奪的で残酷極まる憲兵政治」という痛烈な表現から明らかのように、何よりも憲兵の失政を重く見、槍玉に挙げている。笠原の責任につながる内面の一部分を「憲兵の眼」と言い表している（あるいは笠原の日記の中から「憲兵の眼」という表現を取り出している）こともその一環であり、このことは笠原の内部に潜むそれを、言

葉の上で憲兵に押しやる形で外部化し、笠原が「純潔」であることの正当性を高めることにも寄与している。

そして忘れてはならないのは、「作者は笠原宗吉のマニラ滞在中、同じく従軍記者として彼と同じホテルで数ヶ月の生活を共にしたことがあり、ホセ及びマヌエラ・アストリアノ夫妻とも一面識がある」という点である。つまり〈作者〉と笠原は、戦中に置かれた境遇が酷似しているのである。よって、「親フイリピン派」の「代表者であり、急先鋒であつた」笠原が、ホセたちの死、ひいては太平洋戦争がもたらした被害についての責任を問われなければならないならば、〈作者〉も責任を問われることになるだろう。〈作者〉がテクスト外の林を指示することは言うまでもない。ゆえに〈作者〉は、笠原の「純潔」を担保するものを構築することを通じて、彼と非常に似た境遇にあつた自分の「純潔」も証明しようとしているのではないか。その「純潔」を担保するものとは、笠原とホセの両義的な関係性に象徴されるもの——抑圧からの解放や民族の連帯を謳う大東亜共栄圏構想に含まれるヒューマニズムは普遍的なものであつたが、憲兵による運用が拙劣だつたために、「帝国日本」の国策としては破綻したというロジックに他ならない。これに則れば、「憲兵政治」に携わっていない限り、大東亜共栄圏構想の理念を共有したことの責任は無化される。

終戦後に、戦中の軍部の植民地運営等に対する批判が噴出したことについては論を俟たないが、大東亜共栄圏構想の理念は間違つていなかつたという思考も、同時代の言説においてしばしば透けて見えるものである。透けて見えると表現しなければならないのは、「大東亜共栄圏」などの「戦時用語」を「使用」することすら「避くべし」と命じるG H Qの検閲が実施されていたためである⁽⁴⁵⁾が、これらは戦中とは文脈を異にする、終戦後のアジア諸国における独立の機運の高まりを、戦中の日本の取り組みの落とし子であると主張することを可能にし、「フィリピン独立軍」と所属を変更されたホセとの友情のごとく、アメリカによる占領からの日本の独立の夢と重ねられる。

例えば「世界の動き東南アジアの民族運動」(『実業之日本』一九四六年一一月)の泰泉寺清三は、「日本軍部の粗雑な異民族政策は、その凡ゆる地域で土着民族の嫌悪と反感を買」つたが、「アジア人のアジア」のスローガンだけが残り、「独立解放運動への原動力として、働き廻転していった」と論じている。また、「南方民族の独立志向安南とインドネシア」

（『世界経済報』一九四六年七月）の和田敏明は、「蘭印の総督代理ファン・モーケ博士」や「週刊紙タイムのフォリンニユース欄」といった海外の言説を引用し、「一部論者は、南方民族の独立要求の提起に対する日本の影響力を主張する」としたうえで、「安南とインドネシアは、立つべくして立つた」と展開している。

こうした論調に対し、「東亜の変革——諸地域の民主体制樹立への努力——」（『外交評論』一九四六年一月）の牧内正男は、「往々「日本は戦争にこそ敗けたが、被抑圧民族に独立の気運を促したのは一つの功績」と自画自讃する向もある」が、それは「表面的にそう見えるまでで、あくまでこれ等新興国の独立への強い意欲と実行が主動的役割を果したと言うべきである」と警鐘を鳴らしており、こうした「自画自讃」が無視できない割合を占めていたことが窺える。したがって、「失はれた都」にはそうした同時代の言説が折り畳まれており、〈作者〉の狙いは同時代において承認、共有される可能性を強く秘めていたと考えられる。これが、林房雄の人気が復活した理由の一つではないだろうか。

ただし最後に、テクストがそのような腹面のなさに終始するわけでもないことを付け加えよう。本文を「マニラは灰燼に帰した——まさに東京と同じく。一九四三年の終り、まだ我々日本人の『不幸な幻想』が、（中略）大崩壊の徵候を示しはじめなかつた頃」と始め、「やがて、レイテ島強襲の成功となつて、『日本の悪夢』の最後的な大崩壊が始まつたのである」と終わらせていることから分かるように、〈作者〉は大東亜共栄構想の崩壊を強調している。だからこそ、形を変えた夢の継続と、亡き友や自身の責任の無化が必要とされるのだが、その物語もまた崩壊として閉じられるのである。

初出誌のみ、テクストの冒頭にハインリッヒ・ハイネの詩集『歌の本』内の「抒情挿曲」が引用されていることは、この点をより強固にする。引用は以下の通りである。

色あせし愚かなる歌／悩ましく不吉なる夢

今ここに埋め捨てなん／大いなる柩をもてよ。

歌と夢すべてを容れて／葬らん柩にあれば
広く且つ深きぞよけれ／酒いるる酒樽よりも。

…………／…………

運ばせよ柩を海に／広く且つ深き棺には

広く且つ深き墓場ぞ／投げ入れよ柩を海に。

——ハインリッヒ・ハイネ

このエピグラフは、大東亜共栄圏構想という「夢」が、「色あせし愚かなる歌」に転落したことを傍観者として眺める〈作者〉の感傷に通じるが、一方ではそつした〈作者〉のテクスト自体を、外部にあって相対化するものとも解釈できる。このことは、「剣」に従属するのではない自律した「詩」が、なお模索されていることを示すものもあるだろう。

おわりに

本稿ではまず、「剣と詩」の発端から凍結までの軌跡を明らかにした。そして終戦後、林が窮地に立たされていた時期に、従軍体験を活用した小説を大衆雑誌に寄稿し続けていたことを指摘したうえで、その中から「失はれた都」を読解し、終戦後に日本の位置が激変する中で、戦中の体験が見取り図の改変によって、連続的に利用される具体相を提示した。

ただ、「復活」という現象は、他者からの称賛を数多く集めて初めて成り立つものである以上、林という作家やそのテクストがどのように受容されたかという観点から検証することも必要である。この点については稿を改めて記述したい。

後注

- (1) 高澤秀次「林房雄『大東亜戦争肯定論』を読み直す」「神話」と「啓蒙」の逆遠近法」(『作家と戦争』河出書房新社、二〇一一年六月) 五二頁

神谷忠孝「序論」（神谷・木村一信編『南方徵用作家―戦争と文学』）世界思想社、一九九六年三月）八頁。なお、「文芸年鑑・二千六十三年版」刊行以降に微用された作家については神谷の独自調査に基づくため、漏れている作家がいる可能性がある。

(3) 三島由紀夫「跋」（前出『林房雄論』）一二七頁

(4) 「林房雄年譜」（前出『林房雄論』）一二三頁

(5) 小泉浩一郎「年譜林房雄」（『日本の文学 40 林房雄・武田麟太郎・島木健作』中央公論社、一九六八年八月）四七四頁

(6) 保昌正夫「林房雄年譜」（『日本現代文学全集 69 プロレタリア文学集』講談社、一九六九年一月）四一六頁

(7) 毛利順男「林房雄の生涯及び文学的創造」（鶴見大学紀要第1部 国語・国文学編）一九九四年三月）一四一頁

(8) 復刻版の『マニラ新聞』（日本図書センター、一九九一年九月）を使用した。

(9) 石川巧編著「幻の戦時下文学『月刊毎日』傑作選」（青土社、二〇一九年二月）二〇〇頁

(10) 「林房雄著作集 II 日本よ美しくあれ他」（翼書院、一九六九年一月）三七頁

(11) 及川敬一「武田麟太郎 インドネシアの独立を夢見て」（前出『南方徵用作家―戦争と文学』）一三九頁

(12) 復刻版の『スマトラ新聞』（ゆまに書房、一〇一七年四月）を使用した。なお、判読不能の文字を□で表した。

(13) この段落の引用は全て前出『林房雄著作集 II 日本よ美しくあれ他』三九七～三九九頁より。

(14) 一九四六年六月に文藝春秋新社が設立され、「オール讀物」は同年一〇月に同社より復刊された。

(15) 高橋孝次「大衆雑誌懇話会賞から小説新潮賞へ――『中間小説』の三段階変容説」（『中間小説誌の研究―昭和期メディア編成

(16) 史の構築に向けて―』研究報告書）（一〇一五年二月）八頁

(17) 林は一九三七年に上海戦線に従軍するなど、南方より先に中国や満洲を訪れている。

(18) 前出『林房雄著作集 II 日本よ美しくあれ他』三九九頁

(19) 筆者私藏の『妖魚』改め『白夫人の妖術』の奥付には「十六刷改版」（一九六九年八月）とあり、版を重ねていることが分かる。なお書名の変更は、一九五六年六月に『白夫人の妖術』を原作とした映画『白夫人の妖恋』が公開されたことが要因と思われる。

(20) 『決定版 三島由紀夫全集 32』（新潮社、二〇〇三年七月）三八九頁

(21) 「失はれた都」の引用は全て初出誌より。

(22) 加えて、「イントラモロスの教会堂」の描写も、「剣と詩」のそれを踏襲している。その他、「マニラ・ホテルの地階」にある「土産物の売場」で売子をする「タカログ人の姉妹」に関する挿話は、前出「南方と日本人の反省」で、また、「農民の姿こそ、ま

25 24 23 22

ことのフィリピン民族の魂であらう」とする笠原のフィリピン観は、前出「大東亜の文学世界文学としての東洋文学」等で語られているものであるなど、「失はれた都」には林の従軍体験の影響が色濃い。

「剣と詩」の引用は全て『毎日新聞』一九四四年一二月一九日～二四日（「サンパギータの花陰に」）より。

松本和也「大東亜會議・大東亜共同宣言と文学（著）」（立教大学日本学研究所年報）二〇一九年八月）九頁

前出「大東亜會議・大東亜共同宣言と文学（著）」一五頁

山本武利『G H Q の検閲・諜報・宣伝工作』（岩波書店、二〇一三年七月）七六頁